

J.-J. ルソーと合自然の教育(I)

コンペーレ 著
空本和助* 訳
宮本光雄

Une traduction de “J.-J. Rousseau et l’Éducation de la Nature” de Gabriel Compayré

Wasuke SORAMOTO

Mitsuo MIYAMOTO

はじめに(訳者)

これは、Gabriel Compayré: J.-J. Rousseau et l’Éducation de la Nature. (《Les Grands Éducateurs》, Paris, 1901) の翻訳である。

原著者であるガブリエル・コンペーレ(フランスの教育学者・教育行政官)は、1843年1月2日、フランスのタルン(Tarn)県アルビ(Albi)に生れた。パリのリセ、ルイ・ル・グラン(lycée Louis-le-Grand)を経て1862年にパリ高等師範学校に入学した。卒業後ポー(Pau)およびポアティエ(Poitiers)のリセの教授になり、1874年ヒューム(David Hume, 1711~1776)の哲学に関する研究により博士号を授与され、同年ツールーズ(Toulouse)大学の哲学教授になった。1881年にタルン県の代議士に選出され議会で公教育問題を論じた。1889年の選挙に落選後、リヨン(Lyon)大学総長を、次いで文部省督学官(inspecteur général de l’Instruction publique)およびフォントネー・オー・ローズ(Fontenay-aux-Roses)女子高等師範学校の教育学教授を歴任した。1907年、精神・政治科学アカデミー(Académie des sciences morales et politiques)の会員になり、1909年に教育評論誌である『現代教育者』(L’éducateur moderne)の主幹になった。1913年2月24日、パリに歿した。

コンペーレは、教育学の普及者であつたばかりでなく、科学的な教育学者でもあつた。彼によれば、教育とは一個人の意志を児童の心身上に及ぼす有意的・具案的行為であり、それは児童の身体的・知的および道徳的諸能力の自然的発育を助成するものでなければならない。この自然的発育を助成するためには、何よりも児童の心身の発達過程を充分に観察することから出発しなければならない、のである。ここに、われわれは、彼がチュルゴ(Turgot)やルソーの教育観を理解し、解明し、発展させると共に、彼が心理学と生理学とに教育方法論上の基礎を求めた、ということをやみとることができる。彼はフランス

* 広島大学名誉教授

で最初に、教育学を心理学、特に児童心理学によって基礎づけ、それを実験的に確立しようと努力した。その著『児童の知的・道徳的発達』(L'Évolution intellectuelle et morale de l'enfant, 1893)は、感覚、記憶、想像、本能、模倣、好奇心、判断、推理、言語、遊戯に関する自分自身の子どもの観察に基づいている。その著『青年期——心理学と教育学に関する研究——』(L'Adolescence: Études de psychologie et de pédagogie, 1909)は、スタンリ・ホール(Graville Stanley Hall, 1846~1924)の研究を総合的で共感的な批評眼をもってフランスに紹介した。そして、一般哲学から独立したものである彼の教育科学の概念は、当時のフランスにおいては全く新しいものであった。彼は師範学校教育や大学や教育会議において科学的教育学を最も重要視し、フランスにおける教育科学の発展に貢献したのである。

彼の翻訳と著作については、ロック(Locke)、サリ(Sully)、ハクスリー(Huxley)などの翻訳と、ルソー(J.-J. Rousseau)、スペンサー(H. Spencer)、ペスタロッツィ(Pestalozzi)、マセ(J. Macé)、コンドルセ(Condorcet)、ヘルバルト(Herbart)、ペコー(F. Pécaut)、モンテーニュ(Montaigne)、デミア(Démia)、マン(Horace Mann)、ジラルル(le Père Girard)、フェスロン(Fénelon)、フレーベル(Froebel)に関するパンフレットとがあり、教育学説史として Histoire critique des doctrines de l'éducation en France depuis le XVI^e siècle, 2巻(1879)、教育学史として Histoire de la pédagogie (1885)、教育学説として Cours de pédagogie théorique et pratique (1886)があり、その他 Élément de l'instruction civique et morale, 2巻(1880) ; l'Éducation intellectuelle et morale (1908) ; Organisation pédagogique et législation des écoles primaires. などがある。*

さて、ここに取り上げたコンペーレ著『J.-J. ルソーと合自然の教育』は、コンペーレがリヨン大学総長であったときに刊行されたものであり、この序文にも述べられているように、『偉大な教育者』(Les Grands Éducateurs)叢書の最初にルソーを取り上げることからも彼が教育史上如何にルソーを重視していたかが理解できる。それ故、この書は、ルソーの教育思想を究明する上から重要な文献であるということにとどまらず、コンペーレのルソー教育観などを明らかにするという点からも重要な文献であると考え、ここに貴重な紙面をさいていただいた次第である。このような訳で、数回に分けて掲載せざるを得ないことを先ずおことわりしておきたい。

この書は、序文・第I章～第VI章・参考文献から構成されているが、各章のタイトルや訳注は、読者の便宜を考えて、訳者が試みにつけたものである。また、R. P. Jagoの英訳版: Jean Jacques Rousseau and Education from Nature by Gabriel Compayré, New York, 1971 (Originally Published: 1907)を参照し、原典の文意をそこなうことなく、文の通りをよくするため言葉をおぎなったところもあるということを付言しておきたい。

なお、訳出にあたって、原文のイタリック体の著作は『 』であらわし、引用符号の付されている部分は「 」であらわした。訳注は最後に一括してかかげた。

(注)* コンペーレについては、Étienne Gillon, Jacques Hollier-Larousse, Jean Ibos-Augé, Claude Moreau et Jean-Louis Moreau (direction): Grand Larousse encyclopé-

dique ; Paul Robert (direction) : Dictionnaire universel des noms propres ; Edwin R. A. Seligman (ed.) : Encyclopaedia of the Social Sciences ; Clarence L. Barnhart (ed.) : The New Century Cyclopedia of Names ; 渡辺誠, 「コンペーレ」, 『教育学辞典』, 岩波書店 ; 吉田正晴, 「コムペイレ」, 『教育人名辞典』, 理想社などを参照した。

序 文

各時代の、そして各国の『偉大な教育者』にあてられるこの一連の研究論文を刊行するに際して、われわれはいくつかの目的を念頭においている。

まず最初に、何かある輝きでもって、ヒューマニティの知育と訓育を改革し、進歩させるのに貢献したすべての人々を、そして教育史の功績名簿に掲げられるに値するすべての人々を、彼らの徳性の中に、彼らの思想と行動の中に、彼らの方法と同様に彼らの理論の中に、よみがえらせることである。

しかも、これらの英雄的な姿の一つ一つを浮き彫りにした後、文明化された諸民族の努力と進歩を一連の絵姿で明らかにするために、彼らの独自性を、これらの改革者たちが生きた時代の一般的な風潮や、彼らの国の教育制度や、彼らの民族の特質の如きものにもまた関連づけることである。

最後に、われわれが意図しているのは、単に歴史的な物語を書くことではない。われわれの望みは、はなはだ大きいのである。即ち、われわれの望みは、ずっと以前にいだかれていた考えを現代の世論や、現代社会の必要や要望と対比させ、そして、このようにして、20世紀に直面する教育学的諸問題の解決を準備することである。

もし、われわれがこの肖像集を開始するために J. - J. ルソーを選んだとしたら、それは、彼が確かな案内者、申し分のない教師であったからではなくて、教育に関して、彼は他の人々の思想を大いに鼓舞した人であり、近代運動の首唱者であり、彼に続いた多くの教育者たちの「リーダー」であったからである。二人だけを引き合いに出すと、ペスタロッチ (Pestalozzi) , スпенサー (Herbert Spencer) は疑いもなく彼の弟子であった。彼は仕来りや伝統を攻撃した。彼は声高に過去を中断してしまった。そしてもし彼が、必ずしも教育の分野に良い種子をまかなかったとしても、彼は少なくとも土地を開墾し、じゃまになる雑草を取り除いて、よりよい栽培方法による耕作と施肥の世話を彼の後継者たちに任せたのであった。それ故、われわれは、彼を最初に取り上げることは、正に正当な取り扱いであり、そのあるべきところに彼を据えることになるのである。

教育の事に関心を有するすべての人々に、そしてわれわれと同様に、教育の問題が極めて重要な問題であると考え、民衆の将来はこの問題にかかっており、この問題を除いては如何なる社会改革も不可能であると考え、結局、教育の進歩は、社会にとっても、個人にとっても生か死かの問題であると考え、われわれはこの研究とこれに続く研究をささげる。

J. - J. ルソー

第I章 ルソー教育思想の独創性

J. - J. ルソーの著作が繰り返し読まれ、絶えず注釈がつけられてきたこの2世紀の間、

彼に関するあらゆることが幾度も繰り返し述べられたのであるから、これほど詳細に探究された問題に関して独創力を自負することは、ほとんど不可能である。しかし、自由で大胆な思索家の思想をふりかえることは、常に興味あることであり、その著作にはパラドックスと真実が一杯ばらまかれており、人々の心に最も異常な影響、即ち一種の魅力としての影響を及ぼしており、そして、ルソー思想の支配的な幻惑的魅力のために、ヴォギュエ氏 (M. Melchior de Vogüé)¹⁾ は、最近になって、「ルソーは、われわれの政治と社会の全将来を独占していた。」と言うに及んだのである。教育に関するルソーの思想は、われわれがここで取り扱おうとしていることであるが、『エミール』の出版期である1762年には非常に独創的であって、今なお衆目を集め得るし、そして1899年ないし1900年に、大胆な革新者だという評判を著者たちにもたらした教育に関するそのようなパンフレットや書物は、その評判にもかかわらず、ルソーの貴重な理論のいくらかを単に再版しただけにすぎないのである。とはいえ、前進する進歩の光明と世代の継承によって示された一層広くなった視界を前にして、一見研究しつくされた問題を若返らせ、新しい見解のもとに明らかにし得るということも、真実ではないだろうか。

『エミール』は問題で満ちた解決困難な複雑な書物であり、そして真実が誤謬とまざっており、想像と冒険的な夢想が鋭くて正確な観察および推理力とはなはだしくまざっているので、すぐにはその充分な理解が不可能である。それは、ただちに秘密をさらけ出すような単純で分りやすい著作の一つではない。それは、複雑な構成で、半ば小説で、半ば哲学的な論文である。ルソーが『新エロイズ』を書かなかったと仮定しても、それは、『フランスの小説家 J.-J. ルソー』というファゲ氏 (M. Faguet)²⁾ の最近の研究物の表題を充分正当化することになるであろう。まさに、それは、昨年、アメリカの著述家であるダヴィッドソン氏 (M. Davidson) によって「第一流の心理学者」と彼が呼ばれたように、彼はそう呼ばれるに充分価したのである。情熱的な想像のあらゆる血気と魔力をひめた文筆のあらゆる魅惑でもって、ルソーがそこで述べる主張は、最初は読者を当惑させる。ある者は心を制され、ある者は疑惑の念をいだく。哲学的な思慮と感情的な幻想のこのぼんやりした混乱の中である道を見い出すために、何度も繰り返して熟読する必要がある。彼自身の歩調は踏み迷わなかっただろうか。例えば、エミールを孤児とてわれわれに紹介しておきながら、エミールに読むことを学ばせる方法として、両親からの手紙を彼に受け取らせるようにしていないだろうか。

最初は、バランスを欠いた向う見ずな心情のずぶとさと間違いに抗議しようと思うのだが、さらによく考えて見ると、彼のパラドックスの大部分が真実のたくわえを秘めているということが明らかになる。それは、実際、ありふれた言い草ではなくて、独創的な概念であり、将来を見通した思想であり、その的確さは、経験によって少しずつ証明されるであろう。彼が最も夢中になっているように思われた妄想は、しばしば彼自身から決定的な答えを受けとるのである。どこかほかのところで、彼との一致を見い出すためには、彼が自分の考えを包むのに選んだ構成のトリックをとりのぞきさえすればよいのである。要するに、『エミール』は「火炎と煙で充満した」戦闘的な書物であり、そして戦場では占領した陣地を確認する前に、連続砲撃の煙が消え失せるのを待たねばならないのと同様に、新教育の分野におけるルソーの急速で光り輝く前進の成果を把握し、識別するためには、

ルソーの燃えるような熱弁の中の、誇張した文章の響きを消さなくてはならないし、また比喻や頓呼法³⁾や擬人法の渦を消滅させなくてはならない。確かに、『エミール』のある部分は古くなってしまっているが、他の部分は、それらが真に理解され、それらの威力を充分発揮されるに至るまでに100年以上の経過が必要であったのである。

上記の文章は、この研究を思いついた精神を述べたものである。即ち、ルソーを批判するためというよりはむしろ、彼の著作中で「最も有益で重要なもの」として正しく彼が述べている書物の中に、言わば、彼が埋めているところの永久的真理の宝を明るみに出すためである。彼をユートピア思想の持ち主だとして非難することは、容易な事である。われわれは、この論駁という平凡な仕事をできる限り最小にとどめたい。われわれの主たる目的は、『エミール』の中の如何なる詭弁も隠さないで、如何なる点においてルソーの導きが今なおわれわれにとって有益であり得るかを突き止めることであろう。真の批判というものは、良いところを強調し、そして良いところを明白にせんがためにのみ悪いところを取りあげることなのである。ルソーは、彼の同時代の人々や彼の生きた時代のためというよりはむしろ、子孫のため、後世のために発言したのである。『エミール』の忘れられている奥底に、幾つかの考えが潜在しており、それは、今まで気づかれなかったが、現代の人々の教育に有効であり、現在の要望に直ちになっていることが判明するのである。哲学者であり、「源泉の発見者」である彼の慧眼は非常にすばらしかった。彼はフランス大革命に備えると同時に、30年も先立って、これを予言していた。しかしながら、その著作全体に生命を吹き込んでいる一般精神は、細分されている幾多の真理よりも、その重要性がはるかに大きいのである。『エミール』は、教育者の思索の永遠の対象物として存続する価値があり、それは、何よりも人間性に基づく信頼と希望のなせる行為だからである。

第二章 ルソーとその思想的背景

ルソーは真に首唱者である。それどころかまさに革命家である。彼は、「諸君は、歴史の再出発のために召集されている。」と国民公会の議員たちに対するバレール (Barère)⁴⁾の力強い演説の中で表明されているように、社会の再構成者であり、人類の再生者であると主張した1789年の人々にも、さらに1793年の人々にも先じていたのである。そのような危機や不安の時代においては、用心深い思想家たちの注意が子どもたちや教育に向けられるのは当然である。というのは、教育によってのみ新しい魂を再生された生活の道に沿って導くことが期待できるからである。そのようなことが、ルソーの志すところであった。彼は、有罪と宣告する現実に対して熱烈に抗議して、万事について人間諸制度の根本的な革新を熱望する、言うなれば、改革者であり、夢想家であった。この理想への訴えは、——彼がすでにその批判的熱意を向けていたそれらの当初の企図については言及しないことにしておくが、——彼の主たる著作の輝かしい三部作となったのである。それは1759年における『新エロイズ』、1762年のほんの一年間における『社会契約論』と『エミール』であって、三年間に続けざまに刊行されたのである。この三つの傑作は、形式と主題の相違にもかかわらず、共通のインスピレーションから発しており、第一の著作は家庭のモラルにおいて、第二の著作は政治組織において、最後の著作『エミール』は児童や青年のための教育の原則において、事実同じように、社会の改革に向かっているのである。

ルソーの創作の才ある独創力がどれほど強大であっても、われわれは、決して、8年間の思索を要した彼の教育体系が、天才の手際であるとか、過去において何者によっても準備されたこともなく声明されたこともない奇跡的な啓示であるなどと主張するものではない。ルソーには、先駆者や霊感的刺激を与えた人たちがいた。ベネディクト派の修道士であるドン・カジョ(Dom Cajot)は、もっと有効に自分の時間を使えばよかったのに、『ルソーの盗作』(les Plagiats de Rousseau)と題して大作を書いた。盗作ではないが、確かに模倣や借用はあった。天才たちの最も有名な諸概念のいくつかが、天才たちの個人的思索の深さによって、言わば、漠然とした知的影像に実体を付与することに天才たちが成功する以前に、おぼろげながら感知されており、輪郭ができていたのだということが確証されるところとしても、最も独創的な天才たちの栄光をみじんも弱めるものではない。ルソーは、彼が絶えず引き合いに出すモンテーニュ(Montaigne)に感化されていた。彼は読書し、ポール・ロワイヤル(Port-Royal)叢書を「むさぼり読んだ。」フェヌロン(Fénelon)や、また「賢いロック(Locke)」,「善良なロラン(Rollin)⁵⁾」,「博学なフルーリ(Fleury)⁶⁾」は、彼にそのすばらしい教訓のいくつかを示唆した。実用的な精神とやや単調で健全な感覚の持ち主であったロックは、確かにルソーときわだった類似点はないが、弱々しく、柔弱な教育や、また「書物中心の」教育に反対するルソーのキャンペーンに精神的影響を与えた。ルソーはラブレール(Rabelais)に精通していたようには思われないが、エミールの教育と、若いガルガンチュアおよび他の想像上の生物や自然の生徒のためにエピステモンが施した教育との間には、明白な類似点があるのである。ルソーは、企画に非常に豊かな創造力の持ち主であるサン・ピエール(Saint-Pierre)大修道院長については、その著『永久平和の草案』(le Projet de paix perpétuelle)に注釈を付し、それを研究したばかりでなく、彼は、それを自分の実利主義的な傾向と道徳教育への眼識とで継続したのである。その他の人名もおおよそ言及されてしかるべきであろう。……しかし、『エミール』の著者は、彼が手に触れるものは何でも変貌させ、また彼が借用するものは何でも変形させる。彼の豊かな想像力の中で、他の人から借り入れた考えは新たになり、色づくのである。即ち、おずおずしたものは強靱になり、漠然としたものは鋭い定義を得る。まるでそれは、弱々しい小灌木が豊かな肥えた土壌に移植されて、力強い喬木に成長するかのようである。

ルソーのすべての先輩のうちで、新しい道を最も明瞭に跡づけたのは、恐らくチュルゴ(Turgot)であろう。それに、『エミール』の著者はチュルゴが1751年に、『ペルー人への手紙』(Lettres péruviennes)の著者として当時有名であったグラフィニー夫人(M^{me} de Graffigny)宛に出した長い書簡——即ち、真実の覚え書——の中で述べている諸見解について知っていたようには思われない。しかしながら、相互の打ち合わせがなくても、同時期に、活動的精神の持ち主たちが同じ着想で遭遇することは、そうまれなことではない。ルソーより10年も前に、ルソーと同じような信念で、チュルゴは既に自然に帰ることを説いている。「われわれの教育は、ほんの術学にすぎない。即ち、万事が自然に反してわれわれに教えられている。」——「自然を手助けするために、自然を研究し、自然をよく調べ、また自然に反対する不都合から解放されなければならない。」——「自然が直接知覚できるあらゆる事物で子どもたちに呼びかけているのに、子どもたちでは把

握できない多くの抽象的な諸概念を子どもたちの頭に詰め込むのである。」と。われわれの傾向が本来純良であるという『エミール』の根本的な金言に至るまで、もうすでにチュルゴによって認められている。即ち、「自然は、人間の心の中にすべての徳の種子をまいた。それらが開花するままにまかせておけばよろしい。……」と。

他の例を引用するまでもなく、周囲の空気に、萌芽状態の思想がルソーのまわりに流布されていて、彼はそれらをかき集めて発展させたのだということは明白である。しかしながら、彼は自分の「教育」論の実質を、彼に欠けている実際の体験からではないにしても、彼自身から、彼自身の非常に豊かな貯えから、また人間性についての彼の「先験的」諸見解から、引き出したということも、同様に明白である。ルソーは、自分が目撃したり、観察したりした以上に推理し、想像した。これは、彼が観察の必要性を見落したからではない。即ち、彼は観察の必要性には充分気づいていたし、彼が取り組もうとしている重要な問題を全能力をもって処理していくためには、自分がどんな点で不充分であるのかを正確に知っていたのである。このことは、1759年1月15日に——この時期、『新エロイズ』を書き終えて、彼は『エミール』の文章を本気になって書きはじめていたのだが——、彼の保護者の一人であるクレイキー夫人（M^{me} de Créquy）宛に書いた彼の手紙によって明らかである。「教育に関して、少しの手助をいただけるならば、私は紙面に書きつづりたくなるような教育問題についてのいくらかの考えをもっています。しかし、私に不足している観察がいくらか必要です。奥様、あなたは母親であり、信心深い哲学者です。つまり、あなたは、御子息を教育してこられました。あなたのおひまな時に、この問題に関するいろんな意見を書き留めて、それらを私に知らせて下さいませんか。それらが有益な著作作成への助力となるならば、あなたの御尽力は、きっと報われると存じます。……」と。自分自身の子を育てたことのなかった不自然な父は、他人の体験を頼むようなはめになったのである。……

それ故、ルソーは、子どもの取り扱い方式を確立するためには、子ども時代の研究が必要であるということをよく知っていたのである。もし、彼がフランスに新しい文献を賦与し、ローマン主義の先駆者の一人であるということが正しいならば、彼が、「児童心理学」という名で数年前からはやっていたそれらの非常に重要な研究を、彼なりに開始したのだと断言することも、同様に正しいであろう。『エミール』の長ページにわたって至るところに書かれている子ども時代の特性や好みについての多数の正確で微細な観察を収集すれば、この新しい心理学に関する相当豊富な章を作成することも容易であろう。「子どもは、現在のことしか考えていない。……ちょっとした気転で、人は子どもに、うぬぼれさせたりねたんだりさせないで、何かを好きにさせたり、熱中さえもさせたりできないことは何もないと私は思う。彼らの活発さ、彼らの模倣心、特に彼らの本来の快活さは、このことのためには充分である。……あらゆる年齢において、特に子ども時代においては、創造し、模倣し、作り出し、力や活動を外に表わしたいと思うものである。……」

これらの引用は何倍にもふやすことができるであろうし、またルソーが子どもたちを研究するのをどんなに喜んでいたかということがわかるであろう。——悲しいかな、なぜ、他人の子どもたちを加えなければならないのか。学校から帰るのを見張り、またかわいい生徒らの会話や遊びやいたずらをこっそりと見守るために、自分の誤ちで空虚になってし

まったわびしい我家の窓辺にたたずんでいる彼を見るのははじめである。……『孤独な散歩者の夢想』の最後から2番目の章で彼はこう述べている。「幼な子たちがともに戯れ遊ぶのを見守るのを私以上に好んだ人があるとは思われない。」そして彼は付け加えて、「もし人の心を知ることによって私がいくらかでも進歩したとすれば、その知識を私にもたしてくれたのは、子どもたちを見つめ、観察している際に、私が感じていた喜びである。」と。

しかしながら、もし、ルソーが彼らの戯れているのを垣間見た往来の数人の「いたずらっ子たち」との一時的なこの交わりの代わりに、わが子の誕生とその精神の発達を日々見守る父親の注意深い観察を行うことができていたとしたならば、彼の心理学はもっともっと正確だったであろうに！……なお、ルソーが不法にも自分の5人の子どもを捨てたということから、彼が教育に心を配るようになったということは、注目に値することである。それは、あたかも彼が、あらゆる自分の最も重大な道徳上の欠陥を一部分でも償わなくてはならないと感じていたかのようである。「私の誤ちが私の心をいっぱいにしているという考えが、教育の問題に私の思索を向けさせる一因となったのである。……」と。

ルソーになお欠けていたのは、教育の専門的な経験である。彼の放浪的な若い時代やbohémien的な生活のうちに彼が携わった長い職業一覧表にそのことを私は充分気づいている。つまり、彼は相継いで、彫刻師の徒弟、書記官の見習、召使、従僕、従者、店員、秘書、楽譜写字生——ルソーに好意をよせなかったグリム (Grimm)⁷⁾ が、ある日彼に清涼飲料販売業者になることを勧めたこともあったが——であったのである。また家庭教師という職もつけ加えられなければならない。しかし、彼はその職にほとんど熱意を示さず、いやいやながら従事したのだ！……1739年に——ルソーはその時27才であったが——リヨンの立派な司法長官であるマブリー (Bonnot de Mably) は、彼の二人の息子の教育をルソーに依頼した。最初、彼はこの仕事の才能があると思って、この仕事に専念した。しかしながら、彼は急に迷いから目がさめた。即ち、「私は役立つことを何もしなかった。」と。彼は、「子どもたちにとっては常に無益で有害な」感情と議論と怒りという三つのしつけ方しか用いることを知らなかった。感情、これを彼は決して見棄てないであろう。なぜなら、エミールにある誤ちを叱責するのに、家庭教師が「おお生徒よ、あなたは私に心配をかけたんだよ！……」とただ言うことによって関与するであろうから。しかしながら、議論、これを彼は子ども時代の教育からはようしゃなく排除した。それは、ロックの主義に反して、子どもたちとあまりにも早くから議論したり、道理にかなった話をしたりするのは適切でないとそれ以後確信したからである。「子どもたちは議論家かもしれないが、そのためにそれ以上道理をわきまえない。」と。自分に少しも適さなかったこの職を急にいやになったので、ルソーは、自分の二人の生徒のうちの一人であるサント＝マリ (M. de Sainte-Marie) のために教育案を作成して、その年の終りにこの職をやめた。その教育案は、思想においても、文体においても、あの光彩を放つ深遠な『エミール』の著者を予告するものではなかったのだが。

ルソーが子どもの精励な観察者でも、教授でもなく、また生徒でもなかったが——というのは、彼は決して一貫した研究をしたこともなかったし、いわゆる「ユニヴェルシテ・デ・シャルメット」(l'Université des Charmettes) と呼ばれていたところの学生にすぎ

なかったからであるが——その代りに、彼は大いに感じ、大いに生きたし、そして、力強い精神を形成するためには、「コレージュ・デュ・プレシ」(Collège du Plessis)での正規の教科課程では、確かにあまり有効でも、また効果的でもなく、それよりも、ルソーをあらゆる社交界に導き入れ、控えの間と同様に客間に連れていき、引き続いて、彼を哲学者たちの友人にしたり、大貴族たちの食事仲間にしたたり、民衆と交際する庶民にしたたり、貴婦人・伯爵夫人・公爵夫人・元帥夫人たちの寵愛者にしたたりする扇動的な生活の方が、より一層効果があったであろう。

ルソーが人類のために仕上げているモデルとしての生徒⁸⁾の概念の中に、彼自身の大半を投入し、彼の生活の多くの思い出と彼の心の反省を組み込んだということには異論をはさむ余地もない。モンテーニュ (Montaigne) は、「私が自分の本の素材である。」と言っていた。ルソーについても同様だろうか。アミエル (Amiel)⁹⁾ が「私の主義と私とは一体ではないのか。(一体である。)」とほのめかしたように、彼もまたそういい得るだろうか。ルソーは、エミールを自分の生き写として、また自分の類似者として考えたのだろうか。アミエルは、自分の最もすばらしい理論の中へ自分自身の実体をただおりこむだけであり、自分がいの一歩に「主格」であると主張している。……われわれは、このことを否定しないし、また一般に、教育者というものは、他の人が手本にするように彼らが勧める諸計画の中に、言わば、彼ら自身を投影させるという自然的傾向があるということ、われわれはよく知っている。例えば、ルソーが教育におけるあらゆる教化的教授を除去するにあたり、自分自身の経験を法則として立てているだけのことではないのか。「私の知っていることは少ししかないが、それを私は独学で学んだ。私は教師から何も学ぶことができなかった。……」ルソーは独学者であり、エミールもまたそうである。

しかしながら、これに反して、他の如何に多くの点でエミールの教育の想像は、ルソーの生活の実際と、形の上で反対の位置になっていないだろうか。自分の運命に満足している人々は、自分自身の場合に首尾よく行ったことを他の人々に勧めるのは言うまでもないことである。しかし、ルソーは、社会に対してと同様に、自分自身や自分の運命に不満であった。それ故、彼が望んだ教育は、自分がう렔えていた軽卒さや自分が犯していた過誤や過失への対照として、自分自身の境遇に対する反作用的な努力として考えられていたように思われる。気の毒に傷ついた精神と虚弱で病的な身体を持ち主だった彼は、身心共に健全な、強健な理想的子ども像¹⁰⁾を呼び出して自分自身をなぐさめている。彼は、一人の幸福で完全な人間¹¹⁾を創造することによって、自分のみじめさと不完全さに対して自分自身に報いようとしている。

例えば、彼は次のように言っている。「私はまだ何も考えていなかったが、あらゆるものを感じとっていた。」と。ルソーが、極端に走って、すべての感傷的な感情へのエミールに対する手ほどきを15才になるまで延ばしておこうとするのは、彼を過度なまでに感じやすくさせ、生涯にわたって意気を消沈させたこの早熟な興奮の結果をのがれるためではないのか。彼は、読書過多で、10才になるまで、小説の全集をむさぼり読んだ。彼が書物を忌み嫌い、排斥して、エミールに書物をかたく禁じるのはこうした理由であろうか。われわれの偉大な作家たちの中で、子ども時代や青年時代にそんなにまで指導を受けなかった人を私は一人も知らないとブリュンティエール氏 (M. Brunetière)¹²⁾は言った。実際、

彼は、言わば家族というものをもちたことがなかった。つまり、彼の母は彼を産むとすぐに死に、彼の父は彼を甘やかした後、彼を見捨てた。誰も彼を教育しなかった。……こうした訳だから、自分とは正反対の境遇を想像してみるという誘惑をどうしてさけることができようか。つまり、エミールには一瞬たりとも眼を離さない家庭教師がつけられ、結婚式場の入口に至るまでエミールに付き添って、エミールの一举一動を保護するすぐれた指導者がつけられることになるのである。

屈辱的な仲間と捲きこまれた悪い環境にあって、ルソーは、彼の生活の汚濁の中で失ってしまっていた心の威厳と高貴さをすべて知っていた。それ故、名誉と美德の中で人間を教育するために、人間を汚し、墮落させるかもしれない外的事情をすべて排除しよう。エミールは、人間から遠ざけて、ただ一人で生活させよう。……ルソーは、召使の部屋や控えの間でのらくらと過した。彼は、社交界の生活で気晴らしをした。彼は、パリの社交界に常に出入りし、時として社交界の手管によってそそのかされてしまっていた。彼は、軽薄な恋の不義を数多く結んだ。理想の人間¹³⁾にとってそんなことは何も必要ではない。つまり、田舎、新鮮な空気、簡素な野外生活、純粋な愛情、単独で奥深い、自然以外には何も必要ではないのである。……「さらば！パリよ、女はもはや純潔を信じないし、男も美德を信じないそんな騒音と煙と泥の都市よ！　さらば！パリよ、われわれのさがし求めるものは愛情であり、幸福であり、純潔である。われわれは決して汝から充分に遠ざかることはないであろうが！……」

それ故、『エミール』は、幾分か、ルソーの現実の生活に対比させるためにことさらに組み立てられた架空的な構成物である。全くとっぴな妄想ともいえる『エミール』の一世代を弁明するか、あるいは少くとも説明するために、彼の抱負の中の気高いものと彼の生活の中の下劣なものとの間でその著者の心の中に起った内的葛藤を決して見逃してはならない。即ち、彼が理想のために主張した崇敬さと、彼がその中に置かれていて、彼にも幾分か責任のあった境遇のみじめな現実との間のはっきりとするような矛盾を見逃がしてはならない。「彼はほとんどいつもみじめであった。」とグリムが述べているこの男は、たいそう奇妙な冒険で傷つけられ、体の疾病でうちひしがれ、『エミール』を執筆している間に死んでしまうように思った。しかも、彼は、心配性でねつぞうした妄想の病気で錯乱した。そして、年々増大し、ついに彼を自滅へと至らしめるという種類の迫害の狂気でいらだった。彼がそれにはまり込んでいただけに一層よくその悪徳を知っていた社会状態に対して憤激した。彼が自分の若さゆえの「非道」と呼んだことを思い出すたびに屈辱を感じた。そして、かつて彼にこれほどの重い負担をおわせたことがないにちがいないような下品な宿屋の召使いとの同棲をのちになって恥じ入った。即ち、彼は理想の世界へ自分を投げ込む必要を感じた。そしてこの理想の世界で、自分の性格の弱さや自分の運命の暗がりへの腹いせとして、自分の道徳的欠陥を一時的に忘れ、自分の不運を償おうと努めた。彼の生涯がしばしば苦しいドラマであったとすれば、『エミール』のある部分はまことに詩情をさそう魅力的な牧歌・田園劇といえるであろう。彼はこのように述べている。「現実の生存を達成することの不可能性が、私を妄想の国へと投げ入れた。私は自分で完全な人間の社会を組み立てた。……」と。『エミール』においてわれわれが注意を向けなければならない誇張や幻想は、かなりしばしば、その案出者を少しも欺かない計画

的な想像の産物にすぎないであろう。『エミール』の根本方針に従って育てられたソフィー嬢のために彼がヴュッテンベルク（Württemberg）の王にあてた教育計画に関して、王に彼が1763年に書き送っているように、即ち、「これらは、多分、熱病患者の妄想にすぎないでしょう。……現実（あること）と理想（あるべきこと）の比較は私の心をロマンチックにしまい、そして常に私を一切の現実（なること）から遠ざけてしまいました。」と。

ルソーができればなりたかったであろうが、なれなかったものに、エミールになるであろうし、あるいは少なくともルソーはエミールがそうなることを望んでいるのである。

（訳 注）

- (1) Charles Jean Melchior de Vogüé (1829～1916). フランスの考古学者・外交官。主な考古学的調査をパレスチナとシリア (1853～1854) で行った。トルコ (1871～1875) とオーストリア (1875～1879) の駐在フランス大使として勤務した。〔著作〕 *Les Églises de la Terre Sainte* (1860) ; *Inscriptions hébraïques de Jérusalem* (1864) ; *Le Temple de Jérusalem, Essai sur la topographie de la Ville Sainte* (1865) ; *L'Architecture dans la Syrie centrale* (1865) ; *Mélanges d'archéologie orientale* (1869) ; *Inscriptions sémitiques* (1869～1877).
- (2) Auguste Emile Faguet (1847～1916). フランスの批評家・文学史家。当時活躍していたブリュンティエールとならぶ学者・批評家の双璧で、その批評は分析的・再建的といわれ、文学史・悲劇史・作家研究から社会批評に至るまで多面的に活躍し、その著作は膨大である。1901年にフランス・アカデミーに選出された。〔著作〕 *La tragédie au XVI^e siècle* (1883) ; *Corneille* (1885) ; *La Fontaine* (1889) ; *Politiques et moralistes du dix-neuvième siècle* (1891～1900) ; *Histoire de la littérature française* (1900～1901) ; *Propos littéraires* (1902～1910) ; *Propos de théâtre* (1903～1910) ; *Le Pacifisme* (1908) ; *Les Préjugés nécessaires* (1911) ; *Jean-Jacques Rousseau* (1911～1913) ; *Histoire de la poésie française de la Renaissance au Romantisme* (1923～1934).
- (3) 文の途中で急転して、その場にはいない人や擬人化した物・観念に呼びかける表現法。
- (4) Bertrand Barère de Vieuzac (1755～1841). フランスの弁護士・革命政治家。1789年に憲法制定議会の議員、1792年に国民公会の議員となり、ルイ十六世裁判の間、国民公会の議長 (1792～1793) であった。公安委員会の委員として、恐怖政治の推進に当り、その雄弁によって「ギロチンのアナクレオン (Anacréon de la guillotine)」と呼ばれた。テルミドールのクーデター (1794) により流刑、ブリュメールのクーデター (1799) の後赦免された。ナポレオン一世の百日天下に議員 (1815) となったが、王政復古後再追放され、7月革命 (1830) 後赦免された。〔著作〕 *Mémoires* (pub. par H. Carnot, 1843).
- (5) Charles Rollin (1661～1741). フランスの歴史家・教育家。1688年にコレージュ・ドゥ・フランス (Collège de France) の教授となり、パリ大学の総長 (1694～1695) を歴任し、1699年にコレージュ・ドゥ・ボーヴェ (Collège de Beauvais) の司教補に任命されたが、ヤンセン派 (janséniste) 的傾向のため1712年に却けられた。1720年10月に再びパリ大学総長となったが同年12月の演説でヤンセン派を支持したためまたもやその地位を奪われた。〔著作〕 *Traité des études ou De la manière d'enseigner et d'étudier les belles lettres par rapport à l'esprit et au coeur* (1726～1728) ; *Histoire ancienne* (1730～1738) ; *Histoire romaine* (1738～1748).
- (6) Claude Fleury (1640～1723). フランスの教会史家。〔著作〕 *Histoire ecclésiastique* (1691～1720).

- (7) Friedrich Melchior von Grimm (1723~1807). ドイツの批評家。ライプチヒ大学で学んだのち、パリに赴き(1748), ルソーと相知り, ディドロ, ダランベール, ヴォルテール, エピネ夫人らと親交を結び, 1790年までパリにあって活躍した。フランス文学に精通し, 多数の手紙に文学・哲学に関する批評を書き, それを1753年から1789年にかけていろんなドイツの王侯貴族に送り, フランス文化・百科全書派の自由思想の紹介に貢献した。フランス大革命後, 帰国(1790)し, ついでペテルブルグに赴き(1792~1795), ロシア公使としてハンブルクに駐在した。〔著作〕Correspondance littéraire, philosophique et critique (1812~1814).
- (8) エミールをさす。
- (9) Henri Frédéric Amiel (1821~1881). スイスのフランス系哲学者・文学者。ベルリンで哲学の勉強をした(1844~1848)のち, ジュネーヴで美学とフランス文学の教授(1849 et seq.)として, また道徳哲学の教授(1854)として生涯を送った。詩集・論文等があるが, 死後シェレル(Edmund Schérer, 1815~1889)により発表された『日記』により文学史上不朽の位置を保つようになった。1847年から死の直前まで書きつづったというこの日記は, 深い探究心と鋭い批判精神と, 極めて繊細で内省的な自己分析の記録で, 世紀末に生きる孤独なモラリストの悲痛な苦悩をあらわしている。〔著作〕Fragments d'un journal intime (1883~1884).
- (10) エミールをさす。
- (11) エミールをさす。
- (12) (Vincent-de-Paul Marie) Ferdinand Brunetière (1849~1906). フランスの文学史家・批評家。1886年にエコール・ノルマルの講師に任命され, 1893年にフランス・アカデミーに選出され, 「両世界評論」(Revue des Deux Mondes)の主筆(1893~1906)をつとめた。また, ソルボンヌ大学の文学教授もつとめた。テーヌ(Hippolyte Adolphe Taine, 1828~1893), ダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809~1882)の影響を受け, 文学批評に進化論を適用した。〔著作〕Études critiques sur l'histoire de la littérature française (1880~1907); Le Roman naturaliste (1883); Histoire et littérature (1884~1886); Questions de critique (1889); Nouvelles questions de critique (1890); L'Évolution des genres dans l'histoire de la littérature; L'Évolution de la poésie lyrique au dix-neuvième siècle.
- (13) エミールをさす。

(昭和53年10月31日受理)